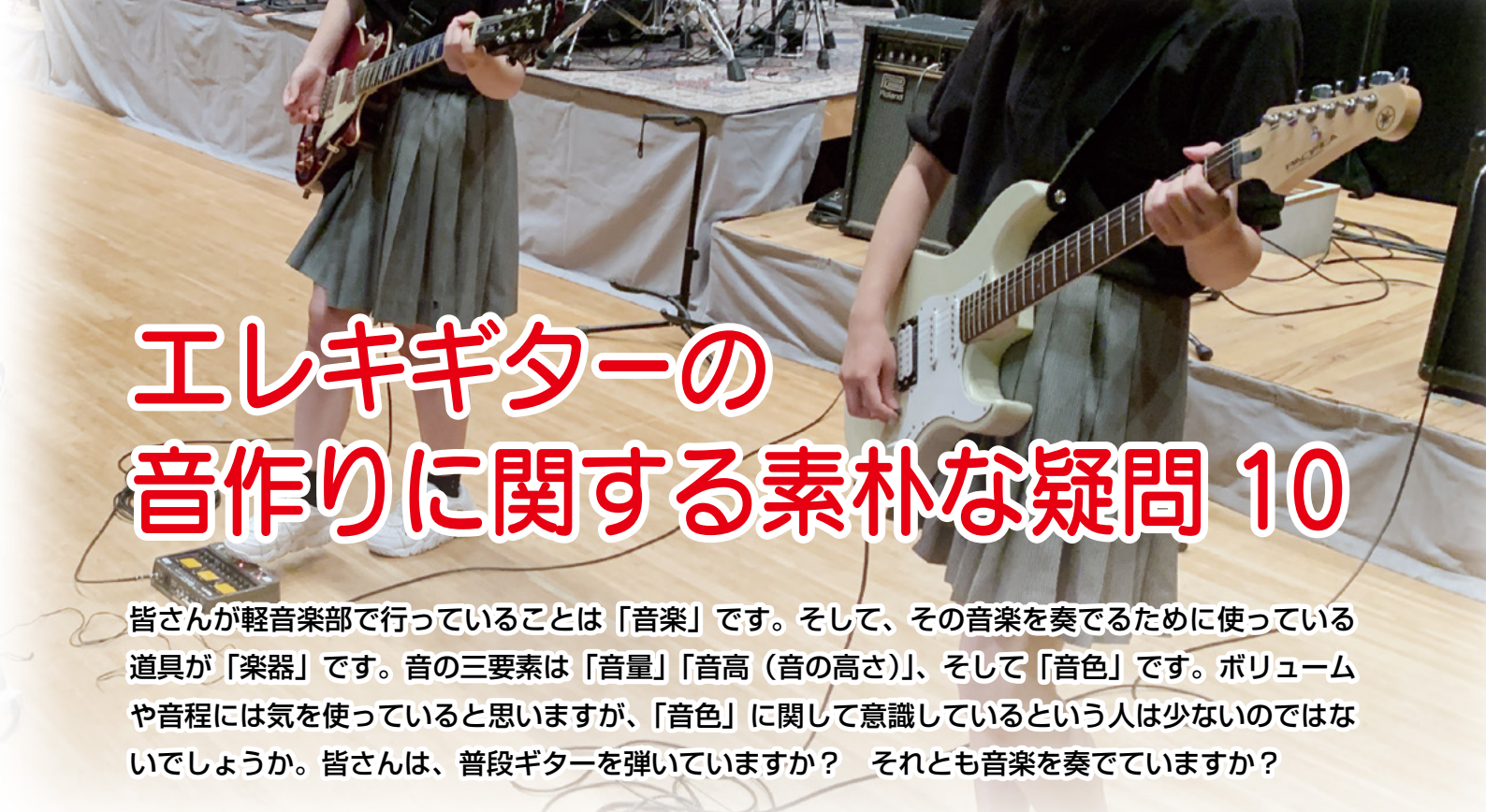




エレキギターの 音作りに関する素朴な疑問 10

皆さんが軽音楽部で行っていることは「音楽」です。そして、その音楽を奏でるために使っている道具が「楽器」です。音の三要素は「音量」「音高（音の高さ）」、そして「音色」です。ボリュームや音程には気を使っていると思いますが、「音色」に関して意識しているという人は少ないのではないのでしょうか。皆さんは、普段ギターを弾いていますか？ それとも音楽を奏でていますか？

音作りはエレキ・ギターの 楽しさの1つ

ギターは楽器です。何を当たり前のことを…と思うかもしれませんが、皆さんは本当にそう認識してギターをさわり、バンドで演奏をしているのでしょうか。音楽は「音の集合体」です。歌詞や各楽器のフレーズも大事ですが、大前提として「どんな音を奏でているのか」は、ある意味最も重要なことといえます。

エレキ・ギターという楽器は、本体だけではなく、アンプやエフェクターといった機材を駆使して音を作っていくため、なかなか「音色」に対して意識が向かない傾向にあります。簡単にいえば、いつもフレーズを弾くことに夢中（精一杯）でそれどころではない、といった人も多いのではないのでしょうか。

似たような楽器でも、ベースは極端なことをいえば、本体のトーン・コントロールのツマミはフル（10）にして、アンプもボリューム以外のトーン・コントロールは真ん中の「5」を基本にしておけば平均的な音は出ます。また、キーボードはエレクトリック・ピアノもシンセサイザーも、プリセットされている音色で十分使えます。どちらも、実際のアンサンブルに合うかは別な話ですが…。

しかし、エレキ・ギターはベーシックなバックギターの音を作るだけでも、「歪み加減」「トーン」「残響」などを考えなければいけなく、リフやソロなどの他、セクションによる音色の切り替えがある場合は、さらにそれらの音作りや調整が必要となります。少々やっかいな楽器ではありますが、実はそこが他の楽器やアコースティック・ギターと大きく違ったエレキ・ギターの面白さであり、最大の魅力なのです。

音作りにもっと興味を持つことによって、ギタリストとして一歩成長するだけではなく、エレキ・ギターの楽しさをさらに知るでしょう。

音作りをすることが前提

そもそも、エレキ・ギターは本体だけで成り立っている楽器ではありません。シールド・ケーブルを使ってアンプにつなげることで初めて音が出ます。

本体に搭載されているピックアップ・マイク（以下、ピックアップ）が、弾かれた弦の振動を拾い、電気信号に変換してアンプに送っています。アンプは、その信号を再び空気の振動に戻し、増幅させているわけですが、いわゆる「音作り」はその間で行う作業です。

すなわち、エレキ・ギターは、ギター本体やギター・アンプ、あるいはその間につなげるエフェクターによって音作りをすることが前提の楽器なのです。

ギターの音作りのポイントとなる部分の例

ギター本体

「ハムバッカー」「シングルコイル」ピックアップの違いで土台となる音色が変わる。



ハムバッカー・ピックアップ

ギター・アンプ

「チューブ」「トランジスタ」の違いで音作りの方向性が変わる。



チューブ・アンプ

ギター本体

「ハムバッカー」「シングルコイル」ピックアップの違いで土台となる音色が変わる。



シングルコイル・ピックアップ

コンパクト・エフェクター



ギター・アンプ

「チューブ」「トランジスタ」の違いで音作りの方向性が変わる。



トランジスタ・アンプ

マルチ・エフェクター



エフェクター

「コンパクト」「マルチ」の2種類がある。使わないという選択肢もあり。



疑問 1 ピックアップの種類による音の違いはどのくらい大きいの？

自分の持っているエレキ・ギターには、どんなタイプのピックアップが付いているでしょう。どちらかといえば「シングルコイル・タイプ」の方が幅広く音作りをすることが可能です。「ハムバッカー・タイプ」は、太くパワーのある音が特徴的なので、アンプで歪ませたナチュラルなオーバードライブ・サウンドに向いています。機種によっては両方のピックアップが搭載されていたり、ハム

バッカー・タイプより歪みやすいものなど種類はたくさんありますが、まずは自分の愛機のピックアップのキャラクターを知っておくことが重要です。金銭的に余裕があれば、ピックアップが違うギターを数本揃えておくことで音楽性に合ったサウンドが得られやすくなりますが、1本でいろいろな音を出したい場合はシングルコイル・タイプがお勧めです。



◀ 代表的なピックアップ。シングルコイル・タイプ（左）とハムバッカー・タイプ（右）の一般的な形状



疑問 2 ピックアップ・セレクターはどうやって使うの？

ピックアップは、ネックに近い方から「フロント」「センター」「リア」と呼びます。ギター本体に搭載されている複数のピックアップを選択するスイッチが「ピックアップ・セレクター」です。特に理由がなければ、シングルコイル搭載のギターはリア、ハムバッカー搭載のギターはフロントにしておくことが一般的です。ギター・ソロやイントロのメロディーなどを単音で弾く場合や、クリーン・トーンをふくよかにしたい時などに、セレクターを操作してピックアップを変えてみてください。アンプやエフェクターを操作しなくても、手元で音色を変化させることができます。



▲ 複数のピックアップを搭載しているギターはセレクトの数も多い



疑問 3

ツマミをどうしたら良いかわかりません。

本体のツマミは、ボリュームとピックアップごとのトーンを調整するものです。しかし、大袈裟なことをいってしまえば、ボリュームも含めたすべてのツマミはフル（10）にしておいて構いません。例えば、ギター1本で演奏するような場合であれば、手元での繊細なコントロールは有効ですが、音量が大きいバンド・サウンドの中で微妙に調節することは難しいといえます。ギターの演奏に慣れてくるまではいつも全開にしておいて、余裕ができてきたら演奏中にツマミをさわって、よりベストなサウンドへ調整していきましょう。どちらかという、初心者の方は演奏中にいつの間にか触ってしまっていて、ボリュームが下がったり音色が変わってしまうといったトラブルも多いので、頻繁に手でちゃんとフルになっているかを確認するように意識しましょう。



▲目視ではなく手の感覚で操作できるようになろう



疑問 4

シールドや弦の種類でも音が変わると聞きました。

厳密に言えば、シールドの種類、弦の種類や使用度、ピックの種類、弾き方（ピッキングの強弱や位置）、その他ギターの木材や部品によっても音は変わります。しかし、専門家ではない限り、市販されている一般的なものであれば聴感上さほど違いはわかりません。消耗品であるシールドや弦はあまり廉価なものは避け、ピッキングは日々研究を重ねるだけで十分です。あとは、ギターの個性差、個性です。そう思って理解してあげて、仲良く付き合いましょう。





疑問 5 学外で演奏する時に普段と違う機種の場合は？

合同演奏会や大会など、いつもと違うアンプで演奏しなければいけない時の音作りについては、ギタリストが最も悩むポイントでしょう。本来、エレキ・ギター本体とギター・アンプはセットで音を作るものなので、いつものアンプを学校から持ち込めれば良いのですが、なかなかそうもいきません。現在の軽音楽部では、真空管を使った「チューブ・アンプ」とトランジスタを使った「トランジスタ・アンプ（アナログとデジタルがある）」が混在して使用されています。特に、Marshall に代表されるチューブ・アンプは、シリーズによって仕様が大きく変わります。対策としては、事前にアンプの種類を確認しておくことが有効ですが、だからといって当日の短時間にいつもの音に近づけるには相当な経験と知識が必要です。いつでもどこでも同じ音を望むなら、アンプを持っていくか、音作りを主にエフェクターで行うようにするしかありません。



▲アンプだけで歪ませたり音作りをするならマーシャル・アンプがベスト。しかし、シリーズによって使い方が大きく違ったり、個体差が多いため研究が必要

アンプの種類	増幅回路	特徴
チューブ・アンプ	真空管	アンプだけで太く温かみのある歪みが出る。ロック向き。使い方に慣れと知識が必要
トランジスタ・アンプ	トランジスタ	クリーン・トーンにクセがなくエフェクターをつなげるのに最適。歪み系の音作りが苦手
デジタル・アンプ	トランジスタ	シミュレーター内蔵のため 1 台で様々なサウンドが作れる。使い方に慣れと知識が必要



疑問 6

JC-120 のインプットはどれが一番良いのですか？

Roland 社の JC-120 (JAZZ CHORUS-120) は、ギター・アンプとしては定番で、軽音楽部でもよく使われています。シールドを挿すインプット端子は、前面に CHANNEL 1 と CHANNEL 2 があり、それぞれ HIGH と LOW があります。チャンネル 1 と 2 の音色はどちらも変わりませんが、チャンネル 2 には「ディストーション」や「リバーブ」といったエフェクト機能がプラスされているので、これらを有効に使いたい場合はチャンネル 2 を選びましょう。HIGH と LOW は、一般的なギターを直接挿すなら HIGH、高出力なギターを使ったりエフェクターを通す場合は LOW につなぎます。ちなみに、背面にある「RETURN」というインプットは、エフェクターで作った音色や音量をそのまま出したい時に使います。ボリュームやトーンなどは、自分のエフェクターやプリアンプで調節することになります。



▲ Roland JAZZ CHORUS-120
アンプ選びに不安があるなら JC を使う方が安全。
ほとんどの学校や会場にあります



▲ トーンのツマミは真ん中 (5) から微調整しよう



疑問 7

ギタリストが 2 人いる時のアンプの振り分けはどうするべき？

軽音楽部の場合、チューブ・アンプとトランジスタ・アンプがあることが多いと思います。上記のように、この 2 種類は基本的な使い方やメリットが違うと考えて振り分けてみてください。楽曲やバンドのスタイルにもよりますが、ケースとしては、①一方がクリーン系のコード・ストロークがメインで、もう一方が歪み系。②一方がコード・ストロークがメインで、もう一方が単音弾きやメロディーを弾くことが多い。③両方ともクリーン気味のバックিংがメインで、片方が単音弾きやメロディーを弾くことがある…など。しかし、こういった組み合わせであっても、歪んだサウンドがメインな方がチューブ・アンプにすることが一般的です。あるいは、エフェクターを駆使して音色チェンジが激しい方がトランジスタ・アンプを使う、と考えても良いと思います。バンドにギタリストが複数いる場合、お互いに何をするのか、どうい

う音を出したいのかを理解しあっていないといけません。フレーズだけではなく、音作りも考えた割り振りを心がけましょう。



▲ アンプのキャラクターを理解して振り分けよう



疑問 8 「コンパクト」と「マルチ」、メリットとデメリットを教えて！

ギター本体やギター・アンプによる音作りだけではなく、その間に「エフェクター」をつなげることによって、音作りの幅は格段に広がります。1～3種類のエフェクトを1台で行う「コンパクト・エフェクター」は、アナログ回路なため音が暖かく、ツマミで直感的にかかり具合やトーン調整を行えることが最大のメリットです。しかし、かけたいエフェクトの数によって複数台をつなげなくてはならないので、金銭面の負担と、ノイズやトラブルが多いことが難点です。一方、「マルチ・エフェクター」は、デジタル回路なため比較的クールなサウンドが特徴ですが、数十種類のエフェクターに加え、アンプ・シミュレーターも内蔵しているため、1台で多くの音作りが可能で、作ったサウンドをバンクにメモリーさせたり簡単に呼び出せることができます。また、ヘッドフォン端子があるので、自宅でもどこでも音作りや練習が可能で、バンド練習や本番の時にアンプに左右されずにいつもの音が出せることも大きなメリットです。扱いが難しいことと、カスタマイズ性が低いことが難点ですが、特にアナログな音にこだわりのないのであれば、マルチ・エフェクターの方がお勧めです。



◀扱いやすく暖かくて太い音が今でも人気のコンパクト・エフェクター



▲良くも悪くもデジタル機器などの特徴のマルチ・エフェクター

	コンパクト・エフェクター	マルチ・エフェクター
機能	1台で1～3種類	1台で50～200種類
回路	主にアナログ	デジタル
調節	ツマミで操作	パネルとツマミで操作
特徴	独特な温かい音。扱いやすくカスタマイズ性が高い	アンプ・シミュレーター内蔵。他にメトロノーム、ルーパー、USB端子、バンク機能
デメリット	ノイズやトラブルが多い	慣れないと使いづらい
方向性	やりたい音楽が明確	様々な音色を出したい
価格	6,000円～25,000円（×台数）	8,000円～300,000円



疑問 9 コピーしている楽曲のギターの音になりません。

まず、音源の音に近づけようとしているところが素晴らしいことです。ぜひ探求を続けて欲しいと思いますが、アーティストの音源はプロのギタリストが様々な機材を使い、レコーディング・エンジニアがさらに音を整えています。取り止めもない言い方をすれば、まったく同じ音にすることは不可能です。ある程度の方向性を探りつつ、自分が弾いていて気持ちの良い音、実際のバンド・

サウンドに合う音作りを目指しましょう。ロック系な楽曲であれば、「歪み系」の種類に気をつけてみてください。また、クリーン・トーンに聴こえる音でも少しだけ歪んでいたり、「空間系」のエフェクトが何かしらかかっている場合がほとんどです。歪み、残響音、トーン…というカテゴリーに分けて考えてみるとわかりやすいかもしれません。

歪みの度合い	
クリーン	クランチ
少ない	多い
歪みの種類	
オーバードライブ系	アンプの自然な歪みを再現。オールジャンルな音
ディストーション系	大音量の倍音豊かな歪み。ラウド系向き
ファズ系	無理やり音を潰した「毛羽立った」特徴的な音

◀同じ歪み系の中でもメーカーやシリーズによって様々に違いがあります



疑問 10 音の抜けが良くないと言われます。「抜け」って何ですか？

「音の抜け」とは、バンド・サウンドの中で聞こえやすいかどうか、ということだと思って構いません。様々な音が鳴っているバンドの中では、音量がそんなに小さくなくてもしっかりと聴こえるギターの音作りが必要です。抜けが悪くなってしまう原因はいくつかありますが、こちらも「歪み」「残響音」「トーン」を気にしてみてください。歪みは、どんなタイプのエフェクトであっても、音の輪郭がはっきりしなくなるためかけすぎると抜けが悪くなります。それは空間系のエフェクトにもいえます。また、トーンのハイを極端に下げると音がこもってしまい、前に出てこなくなってしまう。ギター単体で好みの音作りをしても、他の楽器と混ざるとトータルの聞こえ方は変わります。エフェクトの微調整をしたり、他のパートのメンバーと話し合って、バンド全体で「良

いサウンド」を目指しましょう。そして、それは普段の練習場からライブのステージに移った時でも同様です。常に「耳」で音色の確認をすることが大切です。



▲常に「やりながら微調整」を心がけよう